

日本福祉大学健康社会研究センター・シンポジウム

「日本における健康格差と『健康の社会的決定要因』」・開会のごあいさつ

本日は、日本福祉大学・健康社会研究センター主催のシンポジウム「日本における健康格差と『健康の社会的決定要因』」にご参加いただき、ありがとうございます。主催者を代表して、簡単にご挨拶させていただきます。

日本福祉大学は本年創立60周年を迎えました。本学は設立当初は、社会福祉学部の単科大学だったのですが、この60年間に徐々に学部を増やし、現在では6学部4大学院研究科を有する「ふくしの総合大学」に成長してきました。日本の社会福祉学は歴史的には貧困問題の研究と貧困者支援を原点の1つとして出発したのですが、その当時から、社会・経済的要因が国民の健康や生活に重大な影響を与えること、「病気と貧困の悪循環」はよく知られていました。それだけに、社会疫学研究、健康の社会的決定要因の研究は本学と親和性が強いと考えています。幸い2009年に文部科学省の私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の指定を受け、「健康社会研究センター」を設置しました。本日、その5年間の研究成果を皆さまに御報告できることをたいへん嬉しく思っています。なお、この事業は本年度で終了しますが、本学は今後も、健康社会研究センターを拠点として研究を続けていく予定です。皆さまの引き続きのご支援・ご協力をよろしくお願ひします。

さて、私は医療経済・政策学の研究者であり、以前から、この分野の研究に大きな期待と少しの寂しさを感じています。せっかくの機会ですから、この点について率直に話させていただきます。

私は、最近、本日、記念講演をしていただくイチロー・カワチ先生の新著『命の格差は止められるか』（2013年8月、小学館101新書）を読み、二重に感銘を受けました。1つは、本書が、社会的要因が深刻な健康格差を生んでいること、その健康格差が社会全体の不健康の源となっていること、およびそれを克服し社会全体の健康を守る具体的方法を、膨大な実証研究に基づきつつも、一般読者も理解できるよう、きわめて分かりやすく書かれていることです。もう1つ感銘を受けたことは、この本の第6章（終章）「果たして、人の行動は変わるのか」で、カワチ先生が、行動経済学が実証した「理性は感情に勝てない」という視点に基づいて、健康についての人々の意識や行動を変えるためには、理性だけでなく、人々の感情にも訴えかけることが必要だと強調されていることです。私はこの2つのスタンス・視点は、日本で社会疫学の研究成果が現実の健康・医療政策に活かされるために不可欠だと感じています。ご承知のように、12月5日に成立した社会保障制度改革プログラム法は、社会疫学の研究成果を無視して、「個人の健康管理、疾病予防等の自助努力」・自己責任のみを強調し、それが「喚起される仕組み」の導入を掲げています。社会疫学研究が、このような時代錯誤の政策を修正する一助になることを、大いに期待しています。

と同時に私は、現在の社会疫学研究、「健康の社会的決定要因」研究には、2つの寂しさ、または疑問を持っています。

1つは、その研究で鍵概念の1つとなっている「ソーシャルキャピタル」、あるいは「ソーシャルネットワーク」や「絆」のプラス面のみが強調され、そのマイナス面（個人を共同体に縛りつける一方、異質な他者を排除する因習的側面）を無視または軽視していることです。公平に言えば、それらの概念が説明されるときにはマイナス面にも触れられることが多いのですが、ほとんどの実証研究ではそれらのプラス面のみが指摘されると思います。

もう1つの寂しさまたは疑問は、日本では第二次大戦前から「社会医学」とそれから派生した「農村医学」が、「健康の社会的決定要因」について着実に研究成果を積み重ねているにもかかわらず、それと現在の社会疫学研究が「断絶」しているように見えることです。し

かし私は、医学、社会福祉学、あるいは経済学等、どんな学問分野でも、それぞれの学問の「歴史」を学ぶことは不可欠だと思っています。この点について詳しくは、私の恩師の故川上武先生の『現代日本医療史』（勁草書房,1965）や『日本の医者』（勁草書房,1961）をぜひお読み下さい。

以上で私の挨拶を終わります。

2013年12月8日
日本福祉大学学長
二木 立